

公益財団法人図書館振興財団  
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録  
■ノンフィクションの部■

科学読物研究会 新刊研究会 鈴木 有子

出版点数は特に減っていないようだ。学校図書館、公共図書館対象が主流も変わらない。ベストセラーとして話題になったのは、軽く読むことができる本で続編もでている。類似本も目につく。きっかけになる本、興味が広がる本となるだろうか。

翻訳の伝記絵本も引き続き目を引く。有名な人以外でも、知らなかったモノの発明者など興味深い。写真絵本は昆虫を中心に多数出版された。

その分野の専門家が自伝とともに紹介する形式の読み物「ぼくは恐竜探検家！」(講談社)。他には天文、動物、環境などの分野でも出た。

図鑑出版は映像も加え盛んである。大人の実用になる図鑑も多い。

環境問題では今プラスチックごみがやっとなら騒がれ始めた。しかし出版数は多くはなかった。

新たな忘れられない大災害が毎年のように増えていく。その中で福島県飯館村の7年を記録したシリーズがでた。

他に平和をテーマにした本は、核廃絶が世界の潮流となっていることもあってか、新たな視点で書かれているものが多く新鮮だった。

多様性に富むノンフィクション本は、社会を見ていく刺激剤だ。多様な読者を目指した出版を期待したい。

板倉聖宣さん(仮説実験授業)、加古里子さん(絵本作家)という二人の巨人が亡くなった。お二人からは、大きな遺産が残されている、大切にしていきたい。

## ■入門

★	幼	『にゅうどうぐも』(かがくのとも絵本)/野坂 勇作・さく, 根本 順吉・監修/福音館書店/2018. 5/¥900/(絵本)
★	幼	『そらのうえのそいでんせん』/鎌田 歩・作/アリス館/2018. 12/¥1400/(絵本)
	幼	『ごろりんたまねぎ』(どーんとやさい)/いわさ ゆうこ・さく/童心社/2018. 7/¥1100/(絵本)
	小低	『「いたいっ！」がうんだ大発明 ばんそうこうたんじょうものがたり』/バリー・ウィッテンシュタイン・文, クリス・スー・絵, こだま ともこ・訳/光村教育図書/2018. 12/¥1400/(絵本)
★	小高	『アリになった数学者』(たくさんのふしぎ傑作集)/森田 真生・文, 脇阪 克二・絵/福音館書店/2018. 10/¥1300/(410)
★	幼	『みずとはなんじゃ?』/かこ さとし・作, 鈴木 まもる・絵/小峰書店/2018. 11/¥1500/(絵本)
★	小高	『科学的とはどういうことか いたずら博士の科学教室 新版』/板倉 聖宣・著/仮説社/2018. 11/¥1800/(404)

## ■物理・化学・数学・実験

	小高	『統計ってなんの役に立つの? 数・表・グラフを自在にを使ってビッグデータ時代を生き抜く』(子供の科学★ミライサイエンス)/涌井 良幸・著, 子供の科学編集部・編/誠文堂新光社/2018. 5/¥1200/(417)
★	高校	『めんそーれ! 化学 おばあと学んだ理科授業』(岩波ジュニア新書)/盛口 満・著/岩波書店/2018. 12/¥880/(430)
	小高	『科学のタネを育てよう 1~4 物語でわかる理科の自由研究』/少年写真新聞社/2018. 9~11/1~4全て¥2400/(407)
	小高	『ストローとモールでつくる幾何学オブジェ 100均グッズで学ぶ多面体』/日本数学検定協会・著/日本数学検定協会/2018. 7/¥1200/(750)
★	小高	『おもしろい! スポーツの物理』(世の中への扉)/望月 修・著/講談社/2018. 7/¥1200/(780. 11)

## ■天文・地球

	小低	『もしも月でくらしたら』/山本 省三・作, 村川 恭介・監修/WAVE出版/2017. 12/¥1300/(446)
★	小中	『惑星MAPS 太陽系図絵』/宇宙兄さんズ・文, イケウチ リリー・絵/誠文堂新光社/2018. 6/¥2000/(445)
	小高	『きみは宇宙飛行士! 宇宙食・宇宙のトイレまるごとハンドブック』/ロウイー・ストーウェル・文, 竹内 薫・監訳, 竹内 さなみ・訳/偕成社/2018. 12/¥1200/(538. 9)
	小高	『こども実験教室 宇宙を飛ぶスゴイ技術! 理系アタマを育てる』/川口 淳一郎・著/ビジネス社/2018. 8/¥1600/(538. 9)
★	小高	『星空を届けたい 出張プラネタリウム、はじめました!』/高橋 真理子・文, 早川 世詩男・絵/ほるぷ出版/2018. 7/¥1400/(440. 76)
★	小高	『火星を知る!』(調べる学習百科)/三品 隆司・構成・文, 吉川 真・監修/岩崎書店/2018. 12/¥3600/(445. 3)

	小高	『羽毛恐竜 恐竜から鳥への進化』/大島 英太郎・作, 真鍋 真・監修/福音館書店/2018. 3/ ¥1500/(457. 87)
★	小高	『ぼくは恐竜探検家!』/小林 快次・著/講談社/2018. 7/¥1200/(457. 87)
	小中	『生きものにつながる石ころ探検 ゲッチョ先生の石ころコレクション』/盛口 満・文・絵/少年写真 新聞社/2018. 6/¥1800/(458)
★	小低	『石はなにからできている?』(ちしきのぼけっと)/西村 寿雄・文, 武田 晋一・写真/岩崎書店/ 2018. 9/¥1600/(458)

## ■地理

	小高	『ふしぎな北極のせかい 犬ぞり探検家が見た!』/山崎 哲秀・著/repicbook/2018. 10/ ¥1000/(297. 8)
	小低	『南極点 夢に挑みつづけた男 村山雅美』(ポプラ社の絵本)/関屋 敏隆・文・型染版画/ポプラ 社/2018. 12/¥1600/(絵本)
★	小高	『日本の島じま大研究 2 日本の島じまの大自然と気候』/稲葉 茂勝・著, 田代 博・監修/あす なる書房/2018. 1/¥2800/(291)

## ■生物

★	小高	『なつとう菌』(菌の絵本)/木村 啓太郎・監修, 高部 晴市・絵/農山漁村文化協会/2018. 2/ ¥2500/(619. 6)
	小高	『こうじ菌』(菌の絵本)/北垣 浩志・監修, 早川 純子・絵/農山漁村文化協会/2018. 3/¥25 00/(588. 51)
	小高	『かび・きのこ』(菌の絵本)/白水 貴・監修, 山福 朱実・絵/農山漁村文化協会/2018. 4/¥2 500/(465. 8)
	小高	『にゆうさん菌』(菌の絵本)/佐々木 泰子・監修, ヒロミチイト・絵/農山漁村文化協会/2018. 1 2/¥2500/(588. 51)
	小低	『もりのほうせきねんきん』(ふしぎいっぱい写真絵本)/新井 文彦・写真・文/ポプラ社/2018. 5/¥1500/(473. 3)
★	小高	『ふしぎなカビ オリゼー 千年の物語』(ノンフィクション・生きるチカラ)/竹内 早希子・著/岩崎 書店/2018. 10/¥1300/(588. 51)
	小中	『やんばるの森 世界が目する南の島』/湊 和雄・写真・文/少年写真新聞社/2018. 10/ ¥1500/(462. 199)
★	小中	『みんないきもの』(こどものための実用シリーズ)/阿部 健一・監修, ミロコマチコほか・画, 朝日 新聞出版・編著/朝日新聞出版/2018. 7/¥1300/(480)
	小高	『小林先生に学ぶ動物行動学 攻撃するシマリス、子育てするタヌキ』(ちしきのもり)/小林 朋道 ・著/少年写真新聞社/2018. 7/¥1600/(481. 78)
★	小高	『気がつけば動物学者三代』/今泉 忠明・著/講談社/2018. 7/¥1200/(480. 4)
	小低	『こちらムシムシ新聞社 カタツムリはどこにいる?』/三輪 一雄・作・絵/偕成社/2018. 8/¥1 500/(絵本)

■植物

★	小中	『雑草のサバイバル大作戦 ドクターマキノの植物たんけん』/里見 和彦・作・絵, 高知県立牧野植物園・監修/世界文化社/2018. 5/¥1200/(470)
★	小中	『ひろって調べる落ち葉のずかん』(調べる学習百科)/安田 守・写真・文, 中川 重年・監修/岩崎書店/2018. 11/¥3600/(653. 2)

■動物

★	小低	『ここにも！そこにも！ダニ』(ふしぎいっぱい写真絵本)/皆越 ようせい・写真・文/ポプラ社/2018. 11/¥1500/(485. 77)
★	小高	『サナギのひみつ』(ポプラサイエンスランド)/三輪 一雄・著, 大谷 剛・監修/ポプラ社/2018. 6/¥1500/(486. 1)
★	小低	『イモムシとケムシ チョウ・ガの幼虫図鑑』(小学館の図鑑NEO)/鈴木 知之ほか・執筆・写真・幼虫飼育, 広渡 俊哉ほか・監修, 杉本 美華・監修協力/小学館/2018. 6/¥2000/(486. 8)
	小低	『虫のしわざ探偵団』/新開 孝・写真・文/少年写真新聞社/2018. 5/¥1500/(486. 1)
★	小中	『昆虫の体重測定』(たくさんのふしぎ傑作集)/吉谷 昭憲・文・絵/福音館書店/2018. 6/¥1300/(486. 1)
	小低	『学校プールのヤゴのなぞ』/星 輝行・写真・文/少年写真新聞社/2018. 1/¥1500/(486. 39)
	小低	『きのこレストラン』(ふしぎいっぱい写真絵本)/新開 孝・写真・文/ポプラ社/2018. 9/¥1500/(474. 85)
★	小高	『バイオロギングで新発見！ 動物たちの謎を追え』/中野 富美子・構成・文, 佐藤 克文・監修/あかね書房/2018. 6/¥1500/(481. 7)
	中学	『世界の海へ、シャチを追え！』(岩波ジュニア新書)/水口 博也・著/岩波書店/2018. 5/¥940/(489. 6)
★	小低	『ムラサキダコ 海からあらわれるマントの怪人』(ふしぎびっくり写真えほん)/中村 宏治・写真・文, 奥谷 喬司・監修/フレーベル館/2018. 7/¥1400/(絵本)
	小低	『サメだいすきすいぞくかん ぼくのすいぞくかん』/ともなが たろ・絵, 仲谷 一宏・監修, なかのひろみ・文/アリス館/2018. 7/¥1400/(絵本)
★	小低	『クルマの森のニホンリス』(小学館の図鑑NEOの科学絵本)/ゆうき えつこ・文, 福田 幸広・写真/小学館/2018. 6/¥1500/(489. 475)
	小中	『奄美の空にコウモリとんだ 奄美の生きもの調査』/木元 侑菜・文, 松橋 利光・写真/アリス館/2018. 10/¥1400/(489. 42)
	小高	『カラスのジョーシキってなんだ？ おもしろ生き物研究』/柴田 佳秀・文, マツダ ユカ・絵/子どもの未来社/2018. 1/¥1400/(488. 99)
	小高	『ライチョウを絶滅から救え』(ノンフィクション・いまを変えるチカラ)/国松 俊英・著/小峰書店/2018. 12/¥1500/(488. 4)

■環境

★	小高	『もうひとつの屋久島から 世界遺産の森が伝えたいこと』(フレーベル館ノンフィクション)/武田 剛・著/フレーベル館/2018. 3/¥1500/(291. 97)
---	----	---

★	小高	『わたしたちの地球環境と天然資源 1～6 環境学習に役立つ！(全6巻)』/本間 慎・監修/新日本出版社/2018. 4～/1～6全て¥3000/(519)
	小高	『人の心に木を植える「森は海の恋人」30年』/畠山 重篤・著, スギヤマ カナヨ・絵/講談社/2018. 5/¥1300/(519. 8)
★	小高	『クジラのおなかからプラスチック』/保坂 直紀・著/旬報社/2018. 12/¥1400/(519. 4)
★	小中	『ため池の外来生物がわかる本 池の水をぬいた！』/加藤 英明・文, 越井 隆・イラストレーション/徳間書店/2018. 8/¥1400/(468)

## ■災害・福祉

	小高	『デニムさん 気仙沼・オйкаワデニムが作る復興のジーンズ』(感動ノンフィクションシリーズ)/今関 信子・文, 羽尻 利門・本文・挿絵/佼成出版社/2018. 7/¥1500/(589. 213)
	小高	『うみべの文庫 絵本がつなぐ物語』(文研じゅべにーる)/堀米 薫・著/文研出版/2018. 12/¥1400/(016. 29)
★	小高	『「孫たちは帰らない」けれど 失われた「ふるさと」を求めて』(それでも「ふるさと」)/豊田 直巳・写真・文/農山漁村文化協会/2018. 2/¥2000/(369. 36)
	小高	『「牛が消えた村」で種をまく「までい」な村の仲間とともに』(それでも「ふるさと」)/豊田 直巳・写真・文/農山漁村文化協会/2018. 2/¥2000/(369. 36)
	小高	『「負けてられねえ」と今日も畑に 家族とともに土と生きる』(それでも「ふるさと」)/豊田 直巳・写真・文/農山漁村文化協会/2018. 2/¥2000/(369. 36)
★	小中	『車いすの図鑑 バリアフリーがよくわかる』/高橋 儀平・監修/金の星社/2018. 9/¥3900/(536. 84)
	小高	『ぶどう畑で見る夢は ころも学園の子どもたち』/小手鞠 るい・著/原書房/2018. 4/¥1300/(369. 28)
	YA	『なぜ人と人は支え合うのか 「障害」から考える』(ちくまプリマー新書)/渡辺 一史・著/筑摩書房/2018. 12/¥880/(369. 27)

## ■平和

★	小中	『この計画はひみつです』/ジョナ・ウィンター・文, ジャネット・ウィンター・絵, さくま ゆみこ・訳/鈴木出版/2018. 6/¥1500/(絵本)
★	小高	『ヒロシマをのこす 平和記念資料館をつくった人・長岡省吾』/佐藤 真澄・著/汐文社/2018. 7/¥1500/(319. 8)
★	小高	『報道カメラマンの課外授業 1～4 いっしょに考えよう、戦争のこと(全4巻)』/石川 文洋・写真・文/童心社/1～4全て2018. 3/1～4全て¥2800/(319. 8)
★	中学	『核兵器はなくせる』(岩波ジュニア新書)/川崎 哲・著/岩波書店/2018. 7/¥820/(319. 8)
	小高	『こんなに恐ろしい核兵器 1 核兵器はこうしてつくられた』/鈴木 達治郎ほか・著/ゆまに書房/2018. 12/¥2300/(319. 8)
	小高	『ゲンバクとよばれた少年』(世の中への扉)/中村 由一・著, 渡辺 考・聞き書き, 宮尾 和孝・絵/講談社/2018. 7/¥1200/(361. 8)
★	小高	『アンネのこと、すべて』/アンネ・フランク・ハウス・編, 小林 エリカ・訳, 石岡 史子・日本語版監修/ポプラ社/2018. 11/¥3200/(289. 3)

★	中学	『〈超・多国籍学校〉は今日もにぎやか！ 多文化共生って何だろう』(岩波ジュニア新書)/菊池 聡・著/岩波書店/2018. 11/¥820/(376. 9)
	YA	『はじめての沖縄』(よりみちパン！セ)/岸 政彦・著/新曜社/2018. 5/¥1300/(302. 19 9)

## ■技術

★	小中	『イチからつくるチョコレート』(イチは、いのちのはじまり)/APLAほか・編, パン チハル・絵/農山漁村文化協会/2018. 1/¥2500/(588. 34)
	小高	『ムギの大百科』(まるごと探究！世界の作物)/吉田 久・編/農山漁村文化協会/2018. 2/ ¥3500/(616. 3)
	小高	『イネの大百科』(まるごと探究！世界の作物)/堀江 武・編/農山漁村文化協会/2018. 4/ ¥3500/(616. 2)
★	小高	『花・木の実・藍・野菜・葉っぱのかんたん染めもの』/春田 香歩・著/偕成社/2018. 11/¥3200/(753. 8)
★	小高	『コーヒー豆を追いかけて 地球が抱える問題が熱帯林で見えてくる』/原田 一宏・著/くもん出版/2018. 3/¥1400/(617. 3)
	小低	『ハチごはん 季節のごちそう』/横塚 眞己人・写真と文/ほるぷ出版/2018. 9/¥1500/(383. 815)
	小低	『きりみ』/長嶋 祐成・え・ぶん/河出書房新社/2018. 7/¥1350/(絵本)
★	小高	『人工知能と友だちになれる？ もし、隣の席の子がロボットだったら…マンガでわかるAIと生きる未来』(子供の科学★ミライサイエンス)/新井 紀子・監修/誠文堂新光社/2018. 6/¥1200/(007. 13)
★	小高	『科学がひらくスマート農業・漁業 1 人工衛星とITで米づくり』/小泉 光久・著, 大谷 隆二・監修, 寺坂 安里・絵/大月書店/2018. 9/¥2600/(614. 8)

## ■社会・歴史・政治・伝記・他

★	小中	『おもしろ謎解き『縄文』のヒミツ 1万3000年続いたオドロキの歴史 図解まんが』/こんだ あきこほか・著, 武藤 康弘・監修/小学館/2018. 7/¥1200/(210. 25)
★	小中	『アイヌ もっと知りたい！くらしや歴史』(調べる学習百科)/北原 モコツウナシほか・監修, 岩崎書店編集部・企画・編集/岩崎書店/2018. 8/¥3600/(382. 11)
★	小高	『モスクへおいでよ』(ノンフィクション・いまを変えるチカラ)/瀧井 宏臣・著/小峰書店/2018. 11/¥1500/(167)
★	小中	『じゃんけん必勝法 昔と今』/稲葉 茂勝・著/今人舎/2018. 12/¥1200/(798)
★	小高	『これがオリンピックだ 決定版』/舛本 直文・著/講談社/2018. 10/¥1400/(780. 69)
	小高	『女の子だって、野球はできる！ 「好き」を続ける女性たち』(ポプラ社ノンフィクション)/長谷川 晶一・著/ポプラ社/2018. 7/¥1300/(783. 7)
	中学	『しらべよう！世界の選挙制度 ヨーロッパ・アメリカ・ロシアほか』/大野 一夫・著/汐文社/2018. 2/¥2800/(314. 89)
	中学	『しらべよう！世界の選挙制度 アジア・アフリカ・オセアニアほか』/大野 一夫・著/汐文社/2018. 3/¥2800/(314. 89)

★	中学	『天皇制ってなんだろう？ あなたと考えたい民主主義からみた天皇制』(中学生の質問箱)/宇都宮 健児・著/平凡社/2018. 12/¥1400/(313. 61)
	小高	『非暴力の人物伝 1～3(全5巻)』/大月書店/2018. 7~/1～3全て¥1800/(280)
	中学	『性の多様性ってなんだろう？』(中学生の質問箱)/渡辺 大輔・著/平凡社/2018. 6/¥1400/(367. 9)

**公益財団法人図書館振興財団**  
**第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録**  
**■ノンフィクションの部■**

講演：科学読物研究会 新刊研究会 鈴木 有子

科学読物研究会 鈴木と申します。科学読物研究会は昨年、発足50周年を迎えました。私はその中の「新刊研究会」（以下「新刊研」）という会に所属し、毎月開催している定例会でメンバーと一緒に科学読物の新刊を読んでいます。新刊を読むということは、新しい本との出会いの面白さや楽しみがありますが、地域の図書館で大量に本が廃棄されているのを見ると、近年、昔の本が次々と復刻されてはいるものの、やはりもったいないと感じます。「古いけど取っておいてほしいな」「何とか生かせないかな」と思い、ついついそこから拾ってきて自分の家の居間に増やしてしまう…なんてことをしています。

**■2018年のノンフィクションの傾向**

2018年は児童書の出版点数はあまり減っていない印象ですが、最近刊行された、親子読書地域文庫全国連絡会の「子どもと読書」（2019, No. 434）「2018年 児童書新刊発行点数調査表」によると、全体に発行数がやや減っている一方、「総記」「歴史」「自然科学」「産業」の4分野のノンフィクション関連の本は少し増えているという結果が掲載されています（p. 27）。個人による購入は減っているけれど、学校図書館や公共図書館で購入するという流れになっていて、また、シリーズものや大型本、調べる本といったスタイルが主流になってきているのではないかと思います。

ベストセラーで話題の本は、ここ数年「残念な～」というような冠がつけられたタイトルなどです。軽く読めて、ハンディな形態の本です。『ざんねんないきもの事典 正』（高橋書店、2016年5月刊）の様々な類似本ですが、その「ざんねんな」対象に共感するような内容で書かれています。人間に引き寄せた表現も興味を引くようです。

そのほか気になるものに「境界的」な本もあります。例えば「ちくまプリマー」といったYA向けの新書シリーズがありますが、YA向けの新書は時に一般書として書評などにも掲載され、YA以外の人々にも広く受け入れられるように感じます。また最近、絵本の中にも多くの科学本が含まれますが、出版社としては、単に科学読み物というジャンルで売り込むよりは絵本という体裁で販売した方が、より広い層にアピールできるという狙いがあるように思います。最近では、専門的な内容のものも絵本として売られていることも多く、様々な人が手に取るような仕掛けがされているように感じます。

**■入門**

では、本の紹介に入りたいと思います。まず1冊目は『[にゅうどうぐも](#)』。「ノンフィクション」とは分野が違うのではと思われる方も中にはいらっしゃると思いますが、本作は、1996年に「かがくのとも」の「はじめてであう科学絵本」の1冊として出版された作品です。描か



れている風景がのどかで、最近の入道雲はこんなにのんびりしていないかもしれませんね。入道雲がどんどん発達してきた時にできる「雲の腹」を描いた絵があるのですが（p. 21）、すごく不気味です。この絵本の監修を務めている気象研究家の根本順吉さんも解説で、「雲の腹がこんなに上手に描かれているかをよく見ると、画家の腕の上手、下手が見分けられるといいます」（最終ページ「大気圏を貫く入道雲」より）と書いています。夏に読んでみたくなる1冊です。

こちらも空つながりで、『[そらのうえのそんでんせん](#)』。タイトル通り送電線のお話です。電気や送電線に関わる仕事をしている人を見る機会はあまりないかもしれません。このような仕事に携わる方々が、作業の際にどんな道具を持っていくか、どうやって送電線に登るのか、どのように作業するのかといったことが描かれています。作者の鎌田歩さんは『[まよなかのせんろ](#)』（アリス館、2016年11月刊）という絵本が印象に残っている方ですが、仕事本という側面から見ても面白いです。これから少し送電線を注意して見てみたくなります。運がよければ仕事をしている人を見ることできるかもしれませんね。見開きのページも迫力があり、読者自身も高いところにいることを想像できる本です。

『[アリになった数学者](#)』は、「月刊たくさんのふしぎ」（福音館書店）の1冊として出版された作品で、1年程経ってハードカバーになりました。作者の森田真生さんはフリーの数学研究者の方ですが、『[数学する身体](#)』（新潮社、2015年10月刊）という本が小林秀雄賞を受賞したことは、皆さんもご記憶ではないかと思います。『[アリになった数学者](#)』は文字通り、ある数学者が突然アリになってしまうという全体に不思議な物語です。アリの目を通して見る「数」、人間が捉えている「数」というものの考え方について改めて考えさせられる、大人にも面白い本です。

『[みずとはなんじゃ？](#)』。かこさとしさんの遺作です。かこさんが構想されて、鈴木まもるさんが絵を描かれています。付録として、この本の創作過程をまとめた冊子も付いていますが、本書と併せて読んでみると面白いと思います。かこさんの作品には『[だむのおじさんたち](#)』（福音館書店、1959年刊）、『[かわ](#)』（同左、1962年刊）、『[海](#)』（同上、1969年刊）、『[あまいみず からいみず](#)』（童心社、1968年刊）といった、水にまつわるお話がたくさんありますが、更に一步踏み込んで、水の特性を幅広く伝えるために構想された作品が本書であったそうです（付録「かこさとしさんの『水』への思い」より）。小さい子にも、「氷」「水」「水蒸気」という水の三態変化や、地球の中の水の存在のことを考える、楽しい本かと思います。また、鈴木まもるさんが、かこ作品の中の色々なキャラクターを描いているので、子どもたちと一緒にそれを探す楽しみもあります。

少し難しい本になりますが『[科学的とはどういうことか](#)』を紹介します。著者の板倉さんは、「仮説実験授業」を提唱した方で、本書を出版した仮説社は、板倉さんの「仮説実験授業」など科学教育に関係したものを中心に出版されています（仮説社HP「[仮説社について](#)」より <https://www.kasetu.co.jp/abouts/>）。板倉さんが昨年亡くなられたため、新版としてこの本が出

版されました。朝日新聞社の教育雑誌「のびのび」での連載をまとめたものです。本書の初版は1977年ですが、短い読み物でタンポポの種を育ててみるとか、卵を立てるといった話などが載っています。そのようなテーマについて予想を立てて「実際にやってみよう」と仮説を立てる方法が書かれています。子どもが自分で読める本ではありますが、自ら進んで読むには少し難しい印象もありますので、ぜひどこかで大人が紹介できるといいかと思います。当時、スプーン曲げという大変話題になったテーマなどについても触れています。

## ■物理・化学・数学・実験

物理や科学、数学といったテーマの本は出版点数は多くありません。『めんそーれ！化学』生物学者の盛口満さんは、これまで図鑑的な本も多く出されていますが、今回は、沖縄の夜間中学で高齢の方たちに化学の授業をされた時の体験が書かれています。授業の内容について触れているだけでなく、生徒は60代以上の戦争を体験した方々が多いということもあり、授業での会話の内容は実にユニーク。私たち大人にとっては、その辺りの話も面白いです。ジュニア新書として、高校生・大学生の人たちが読んでどう参考にできるかという意見が選書会でも挙がりましたが、化学が苦手の若者たちに、手渡してみたい本です。

続いて、ちょっと変わったスポーツの科学・物理学です。『おもしろい！スポーツの物理』は、スポーツの本として紹介してもよいのですが、相撲や陸上にはじまり、スポーツクライミングやスキージャンプまで様々なスポーツに関する疑問を、物理の観点から解説している少し面白い本です。例えば相撲での「力士がぶつかる時にかかる力は？」といった疑問や、「陸上」での「すごく速く走る」とはどういうことか、「体重が軽くて有利なケースは？」などの疑問について、様々な物理の法則や数式を用いて説明しています。著者はスキーのジャンプ競技のアドバイスを行ったりするなど、流体力学を専門に研究されている方です。実際にスポーツをしている若い人だと、この本で触れられていることについて実感が湧くことでしょう。

## ■天文・地球

「天文・地球」のテーマでまとめた本の紹介に移ります。今年は、天文などをテーマとした本には楽しい作品が多かったという印象です。太陽系旅行をしたらどんな感じだろう、と想像が膨らむ『惑星MAPS』。宇宙に行ったら何ができるのか、それぞれの惑星はどんなものなのかといったことを、子どもに分かりやすく解説した「太陽系旅行のためのガイドブック」です。最近、身近になってきた火星もリアルな写真が見開きで掲載されていて、迫力があり楽しめます。「宇宙兄さんズ」という一見「何者かな？」という方々が本書の作者です。

『星空を届けたい』は自伝的なところがある作品です。著者は元々星野道夫氏やオーロラに憧れて宇宙の勉強をし、最初は山梨県立科学館のプラネタリウムの解説員として働いていました。プラネタリウムの番組制作を行った時に、色々な人に詩を書いてもらい、それをスペースシャトルに届ける「星つむぎの歌」というプロジェクトも立ち上げられたそうです。その後、長く入院している子どもたちのために病院を訪問し、プラネタリウム届ける「出張プラネタリウム」とい

う活動を行い、2016年からは「星つむぎの村」という団体を作り、全国50カ所くらい回られているそうです。現代人には難しくなっている、星空に感動する心を育てたいという情熱が伝わってきます。

『火星を知る!』。これは最近出版された本で(2018年12月刊)、以前は『月を知る!』(2017年7月刊)という本も出版されています。『月を知る!』は月に関する様々なことが詳しく解説された本でしたが、この『火星を知る!』も、色々な火星の姿をたくさんの写真やイラストで紹介。火星人や火星探査の歴史などについても説明しています。古代からの興味が、探査機のリアルな映像になって、有人探査や住む計画などの未来計画がどうなっていくのか興味が深まっていきます。

宇宙に対し「地球」というテーマで、地学的な観点から紹介するのは『ぼくは恐竜探検家!』。著者の小林さんは、よくテレビにも出演されている恐竜研究の第一人者の方です。しかし、子どもの頃は恐竜マニアではなく、実は仏像マニアだったとのこと。そんな中、たまたま理科クラブで化石を発掘するという活動に参加しますが、なぜか自分たちのチームだけが化石を見つけられません。先生の勧めで丸一日岩を叩き続けて、ようやく小さなアンモナイトを見つけたそうです。それが後の恐竜研究へと続いていくのですが、たまたま条件が合って自費で留学したアメリカでは、英語が苦手で非常に苦労したそうです。化石をどのように発掘していくかという話と、リアルな自身の人生とを絡めつつ描いていて、その辺りが自伝的でもあり、なかなか面白かった本です。

もう1つ、地学入門で『石はなにからできている?』を紹介します。比較的大判の本でとても見やすいです。このシリーズは絵本風のつくりとなっています。石の本というと図鑑が多いのですが、あまり種類の説明はせずに、石の粒々に注目しながら話を進めていて、石そのものの印象がすごく強く残る本です。後半のほうに詳しい解説や、ちょっとした分類などについても触れています。石をじっくり見て、地球の成り立ちも知ってほしいという作者の思いが伝わってきます。

## ■地理

次に、地理関係の本を紹介します。『日本の島じま大研究』という全3冊のシリーズですが、今回、図書リストには第2巻を挙げさせていただきました。これも少し大判の本です。日本は本土も含めた島々から成る国ですが、本土を含めた地理や領土問題、戦争など、著者の社会学的な視点をもって幅広いテーマで解説している本です。中には「逆さ地図で見る日本列島」といったものもあります。こういった切り口から見ても、面白い本だと思います。

## ■生物

「生物」というテーマで集めた本からは、まず、菌の本を紹介します。『なっとう菌』。農山漁村文化協会(以下「農文協」)は、意表を突くようなテーマで何でも本にしてしまう出版社のようで(笑)、「菌も絵本になるのか」と少し驚きましたが、今回納豆菌をテーマとした本が出

版されました。イラストは絵本作家の高部晴市さん。納豆の粒々の1つ1つに顔が描かれていますが、解説文にはとても真面目に菌のことが書かれています。子どもは絵を見て、そして大人は解説を読んで一緒に楽しむということもできるかもしれません。菌を自分で作る方法なども載っていて、農文協らしい本です。

菌つながりで、こうじ菌についての読み物を紹介します。『ふしぎなカビ オリゼー』。「オリゼー」とは、みそやしょう油を作るのに欠かせない「こうじ菌」のこと。こうじ菌は、日本の様々な発酵食品に使われていますが、このこうじ菌(=オリゼー)を「もやし」(「萌やし」)、そして「もやし」を育てることを専門としている人々を「もやし屋さん」というそうです。以前、マンガでも『もやしもん』(石川雅之作、講談社)という作品がありましたね。「枯れ木に花を〜、咲かせましょう」(p. 23)と声をかけながら黒大豆にこうじ菌を撒いていく京都のしょう油屋さんの話や、震災や大規模火災などの危機に直面した何軒もの醸造屋さんが、もやし屋さんが保管してくれていたオリゼーで再帰に踏み切ったことなど様々な話が織り込まれ、もやし屋さんの底力はすごいなと感じさせてくれる1冊です。

おおらかな迫力のある絵で描かれた『みんないきもの』。「こどものための実用シリーズ」の1冊で、どう実用に活かすかは意見が分かれるところではあるかと思いますが、この本では、命あるものはみんな「いきもの」であり、わたしたち人間も「いきもの」であるという視点で捉えています。「夏休みがある」「寒いときに休む」といった素朴ないきものの行動にはじまり、自分たちの家族や仲間をどのように捉えているのかなど、様々ないきものたちを通じて、彼らの生き方も知ることができます。「いきもの」というキーワードを出発点に、更に発展的に考えていくことができる作りになっている本です。

『ざんねないいきもの事典』(高橋書店)シリーズを監修された今泉忠明さんによる、『気がつけば動物学者三代』。父、兄、息子さん、そしてご本人の全員が動物学者の今泉さん一家。小さい頃からお父さんの手伝いをしながら、罌でネズミ捕りをした体験、動物だらけだった家の様子など様々な思い出と共に、今泉さんの動物学者としての半生が綴られています。少年・青年時代を楽しんで過ごし、そのまま今があるという人生。そんなことが分かる1冊です。

## ■植物

「植物」というテーマで2冊紹介します。『雑草のサバイバル大作戦』。四国の高知県立牧野植物園でご勤務の方が作者です。博物館やイベントの展示設計を多く手がけられている方です。植物学の父・牧野富太郎博士をモデルにした「ドクターマキノ」が子どもたちを連れて、不思議な乗り物に乗り、色々な植物を見に行つては、植物の秘密を探ります。マンガ風のイラストを通して、身近な植物・雑草の面白さが味わえる1冊です。

『ひろって調べる落ち葉のずかん』。身近な植物がたくさん登場する図鑑で、じっくり見ることができる面白さがあります。私自身、野外活動を行っているため、図鑑はとても気になる本の1つでもあります。図鑑の場合、通常は「落ち葉」というと、きれいな紅葉した葉っぱが掲載さ

れているものが大半ではないかと思いますが、この本では少し汚れていたり、枯れた葉っぱなども多数掲載されています。260種類も掲載されていますが、お住まいのエリアで全ての落ち葉を見つけることは難しいかもしれません。これをきっかけに、子どもたちが植物に関心を持ってくれるといいなと思い紹介しました。落ち葉を拾ってきて一緒に見る楽しみを、ぜひ味わっていただきたいと思います。

昆虫など小さな生き物も含め、陸・海の両方の生き物についての本は、「動物」というくくりでまとめました。今年も動物の本は大量に出版されています。まず、『[ここにも！そこにも！ダニ](#)』。皆越ようせいさんによる本は、『おちばのしたをのぞいてみたら…』（ポプラ社、2000年8月刊）といったダニや小さな生き物に始まり、途中でミミズやダンゴムシなどの本を挟んで（『ミミズのふしぎ』（ポプラ社、2004年6月刊）、『ダンゴムシみつけたよ』（同左、2002年7月刊）等）今回、再びダニというテーマに戻ってこられました。普段はほとんど目に入らないダニ。この写真絵本ではアップで掲載されていて、とてもインパクトがあります。実際は本当に小さな生き物なんですよね。これくらいアップで見ると、意外とかわいく見えてきますが、私だけでしょうか（笑）。ほのぼのとした写真と文章で綴られた、皆越さんのダニ愛に溢れた本です。

続いて『[サナギのひみつ](#)』。作者の三輪一雄さんは、ナメクジのお話（『ガンバレ！！まけるな！！ナメクジくん』（偕成社、2004年11月刊））など、絵本風の描き方でおなじみの方ですが、今度はかなり「進化」に迫る本です。以前にも、進化をテーマに何冊か描かれていますね。昆虫の進化、そしてそのことにも大きく関わる「サナギ」は、実はすごく不思議な存在です。サナギにならない虫も多くいる中、「三態変化」—幼虫からサナギになり、成虫になるという形態はなぜでき上がったのかを説明しています。個性的な濃い絵で読みどろろがあり、読み通してみると「なるほど」と納得させられる1冊です。

『[イモムシとケムシ](#)』。こちらは図鑑です。イモムシについての本は『[ずら〜りイモムシならべてみると…](#)』（アリス館、2012年6月刊）などの児童をはじめ、大人向けの本でもいくつか出版されていますが、今回はイモムシ図鑑の「決定版」とも言えるのではないかと思います。解説の文章も楽しいです。情報量が多くて読むのは大変かとも思いますが（笑）。毎年図鑑はたくさん刊行されていますが、お買い得なプレゼントなどとしても、ぜひ楽しまれてはいかがでしょうかと思います。

『[昆虫の体重測定](#)』。こちらは、2016年4月に「月刊たくさんの不思議」（福音館書店）として刊行されたタイトルが、ハードカバーとなったものです。昆虫の重さをどのように量るのか、その方法が描かれています。昆虫はとても軽いので、少し特殊なはかりが必要です。最初に登場するのはテントウムシですが、その重さは？ そのほか、ヤブカが1円玉と同じ重さになるには何匹集まる必要があるのか、一番重い昆虫は何かなど、興味深い疑問に答えています。吉谷昭憲さんの緻密な絵と共に楽しめる本です。

次に紹介するのは、『[バイオロギングで新発見!](#)』です。「バイオロギング」とは、「バイオ＝生きもの」と「ロギング＝記録する」という言葉から成る日本で生まれた造語で、動物の生態を知るために人間が追って記録するのではなく、動物自身に記録してもらうという研究方法。現在、そのための装置が開発されて、かなりの種類の動物について調べられているということがよく分かる1冊です。研究者の方々の紹介ページもあります。

『[ムラサキダコ](#)』。足の上に大きな膜を広げて泳ぐ「ムラサキダコ」の、迫力ある写真がたくさん掲載された本です。まるで、マントを広げたようにひらひらと泳ぎ回る不思議なタコなので、ぜひ皆さんも直接本をご覧くださいと思います。また、メスは体長が40cmほどであるのに対し、オスは2～3cmほどしかないようで、これもとても不思議です。私自身、非常に興味が湧いたため、こんな本も紹介してみました。

比較のおなじみのニホンリスについての本を紹介します。こちらも写真絵本です。『[クルミの森のニホンリス](#)』。リスを野外で見る機会はありませんが、この本では長野県八ヶ岳山麓のクルミの森に生息するリスたちの様々な姿を、美しい写真で伝えています。リスが房状の青いクルミの実をくわえて枝の上を移動する様子や、実を食べる様子などが詳しく分かり、面白いです。食事から子育てまで、森で暮らすリスの1年が収められています。

## ■環境

「環境」をテーマに集めた作品に移ります。『[もうひとつの屋久島から](#)』。作者の武田さんは、以前は新聞記者として南極に行かれたこともある方で、2012年に新聞社を辞めて、家族で屋久島に移り住んだそうです。屋久島は皆さんもご存知のように、世界遺産となったことで観光客が押し寄せました。人気の屋久杉は、根が踏み荒らされて枯れてしまう危険性が高まったために展望デッキが設置されて若干改善されたそうですが、それでもトイレ問題など現状はなかなか厳しいそうです。今でこそ保全活動も行われている屋久島ですが、実は過去において貴重な原生林が伐採されていたという事実がありました。そんな困難を乗り越え、世界遺産に登録されたのは屋久杉のためではなく、海から山にかけて亜熱帯から冷温帯で育つ植物が見られる「植生の垂直分布」のためであること、また、今の屋久島の自然があるのは、保全に携わっている方々の努力によるものにほかならないことを伝えています。

少し硬い本ですが『[わたしたちの地球環境と天然資源](#)』を紹介します。全部で6巻のシリーズで、地球の貴重な資源である「水」「森」「土」「空気」「光」「熱」の6つをテーマに取り上げています。例えば第1巻では、わたしたちの命にとってかけがえのない水についてどのような問題があるかを見ていきます。「水道の水は飲めてあたりまえ」であると考えがちですが、実は利用できる真水は少なく、水道水を安全に飲める国は世界中でも限られています。今、環境関係の本が少ないということもあり、特に水や大気に関する基本的な情報をまとめた本は貴重だと思います。

テーマとしてもタイムリーな『クジラのおなかからプラスチック』。現在のプラスチックごみの生態系への影響については、ニュースや雑誌など様々なメディアでも取り上げられてきているようです。本書ではプラスチックが、環境にとっていかに悪影響を及ぼすものであるかということが詳しく解説されています。また、プラスチックが5mmより小さいかけらとなった「マイクロプラスチック」の問題などについても触れていて、海に流れたマイクロプラスチックは、世界各地で食用の海産物から見つかると、私たち自身もかなりのマイクロプラスチックを食べている可能性があるそうです。プラスチック問題については、今後も絵本や児童書などで多く出版されるかと思しますので、その辺りもぜひ注目していきたいと思えます。

『ため池の外来生物がわかる本』。ここ数年、池などに棲みつく外来生物について、テレビ番組で取り上げられて、かなり話題となりました。本書では、そのテレビでも活躍する農学博士の加藤英明さんが「ため池」や、ゴミや外来生物などを取り除くために池の水を抜く作業「かいぼり」、そして「かいぼり」によって見つかる外来生物などについて詳しく説明しています。ため池は西日本に多いこと、農業用に使用していた池が使われなくなり、そこに外来生物が棲みつくようになったといったことなど、ため池の歴史なども併せて知ることができます。後半では「かいぼり」で見つかったミシシippアカガメなどをはじめとする、様々な外来生物を取り上げ、それぞれの詳細データが載っています。あらためて日本の生き物の現状を考えさせられます。

## ■災害・福祉

続いて、社会的なテーマの本の紹介に移ります。原発事故による避難から6年。飯舘村を取り上げた『それでも「ふるさと」』シリーズ（全3巻）は、写真家の豊田直巳さんが現地に入って撮影・取材された内容を元に作られた写真絵本です。豊田さんはチェルノブイリを取材された経験もあり、東日本大震災が起こった後は福島を中心に活動されています。図書リストにも挙げた『「孫たちは帰らない」けれど』では、伊達市の仮設住宅で暮らすおばあちゃんたちにフォーカスを当てています。仮設住宅の暮らしに慣れる一方で、「帰りたい村」への思いもつのおばあちゃんたち。2017年春、飯舘村も避難指示が解除されましたが、放射能に対する不安や、以前のような隣近所の人々がいない寂しさなど、おばあちゃんたちの複雑な胸の内が綴られています。住民の方々の背景に太陽光発電があったり、豊かな景色の中に除染土が入れられたフレコンバッグが写っていたりなど、大震災がいつまでも終わらない災害だということを思い知らされます。まだずっと記録を続けていきたいという豊田さんの思いが伝わってきます。

車いすについて取り上げた本も時々出版されますが、『車いすの図鑑』で監修を務められている高橋儀平さんは、お子さんや高齢者の方、障がいのある方ない方含めて全ての方々が住みやすい生活空間を目指して研究を進められている方でもあるとのことで（「高橋儀平研究室」HPより <http://www2.toyo.ac.jp/~tgihei/>）、本書も単なる「車いすの図鑑」としてではなく、かなり実用的な部分にまで踏み込んで書かれています。車いすを自走で動かすための基本動作—前方直進、左折、右折させるための手の動かし方や、介助で動かす基本動作、坂道や左右に傾斜した道などでの走行のしかたや、リハビリのための施設には、車いすでもすれ違える「広い廊下」、

車いすに乗ったままで体重を量ることができる「車いす用体重計」があることなど、こういった工夫がされているかといったことまで詳しく解説しています。とても興味深い1冊です。

## ■平和

平和をテーマに取り上げた本は、色々な種類のものが刊行されました。絵本『この計画はひみつです』。本書の絵を担当されているジャネット・ウィンターさんは、以前にも『マララとイクバル』（岩崎書店、2015年3月刊）や、『バスの図書館員』（晶文社、2006年4月刊）など、話題になった作家さんですが、今回は原爆の開発についての話です。物語は、ある学校の校長先生のもとにアメリカ合衆国政府から手紙が届くところから始まります。研究のために、学校の土地を使いたいので立ち退いてほしいという内容でした。こうして、のどかな景色が広がる砂漠の中の学校は閉鎖されます。小さい子に向けた絵本ではないかもしれませんが、関連本と組み合わせればブックトークなどにも使えるのではないかと思います。

もう1冊は『ヒロシマをのこす』。こちらは、広島平和記念資料館を作った長岡省吾さんのお話です。長岡さんは元々地質学者でした。しかし、原爆投下の翌日、爆心地近くを歩いて回って原爆の惨さや恐ろしさを目の当たりにした彼は、以後単身で様々な被爆資料を収集し、それらの調査に尽力します。そして「ノーモア・ヒロシマ」を訴えるための資料館を設立しました。著者は広島県内で活動されているライターの方です。物語風に書かれていて、地味ではあるけれど、非常に読みやすい本でした。原発が日本に導入される際「原発の平和利用」という題目で、宣伝のために平和祈念資料館が使われたこともあったそうです。これまで全く知らなかったことがたくさん書かれた本で、とても考えさせられる内容でした。

『報道カメラマンの課外授業 1～4』。石川文洋さんはフリーランスのカメラマンの方ですが、ベトナム戦争を撮った写真でご存知の方も多いと思います。1巻の表紙の若者は若い時の石川さんご自身です。このシリーズは、石川さんが行った長野県の中学校での平和学習の授業を基にしています。大量の写真をもとに構成した授業は、やや荒れていたという中学生たちに届き、たくさんの感想文として掲載されています。勿論教師の方たちの協力も大きかったことでしょう。本の形になったことで全国で平和学習ができることになりました。

『核兵器はなくせる』。2017年7月の国連で「核兵器禁止条約」が成立しました。その条約に大きく関わったNGO・ICAN。その中心で活動されている川崎哲さんの本です。この本も自伝と言えるでしょう。最初の方で、なぜ彼が平和運動に関わるようになったかといったことも書かれていて、ピースボートで活動しつつ被爆者の方々と一緒に船に乗り、世界各地を巡って被害の証言会を実施するというプロジェクトも実施されたそうです。日本の報道などにも見られるように、日本人の意識は少し後ろ向きであるように感じます。当初、「核兵器禁止条約をつくらう」という川崎さんたちに対し、多くの人から「そんな条約ができるわけがない」「現実を知らない理想論だ」という批判が繰り返されたそうです（p. 5）。若い人たちに、川崎さんのメッセージが届くといいなと思います。



『アンネのこと、すべて』は少し作りが特殊な本で、ページ半分の大きさのミニページが各所に組み込まれています。「隠れ家」は退屈じゃない？」「ヒトラーはなぜユダヤ人を嫌ったの？」「だれがアンネ・フランクを裏切った？」など、こどもたちから寄せられたたくさんの質問に答えるためにアンネ・フランク・ハウスが編集した本です。アンネの家の系図や「隠れ家」の間取り、アンネの誕生から死、そして関係者の方々の現在までアンネにまつわる様々なことが綴られ、アンネが生きた世界はどのようなものであったかが、この1冊から浮かび上がってきます。この本をきっかけに、アンネの日記を読むことに繋がればよいなという思いで紹介しました。

多国籍学校をテーマにした本『＜超・多国籍学校＞は今日もにぎやか！』。こちらは「岩波ジュニア新書」の1冊で、横浜市立飯田北いちょう小学校で、国際教室担当の教員として長く携わられた方が書いた本です。学区の一部に「外国に関係のある児童」（外国籍児童や、自身は日本国籍で、親が外国籍である児童など）が多く住む「県営いちょう団地」があったことから、日本を含む様々な国の言語文化を持つ子どもたちが学んでいます。多文化共生の実際について書かれており、日本に住む外国人の方々が増えている現在、子どもだけでなく、先生方にも読んでいただくとよいかという1冊です。

## ■技術

続いて、様々なテーマの産業技術を集めた本の紹介に移ります。ここのところ、農文協による『イチからつくる～』というシリーズが出版され始めていますが、今回『イチからつくるチョコレート』という本が出ました。カカオの栽培にはじまり発酵まで、チョコレートの歴史なども交えつつ解説していて興味深いです。フェアトレードについての説明もあり、チョコレートを様々な視点から見ることができるのではないかと思います。

染め物の本も時々出版されます。『花・木の実・藍・野菜・葉っぱのかんたん染めもの』。これは様々な植物での染め方を分かりやすく紹介した、すてきな本です。ツツジやサクラの花など、比較的身近な材料から液を作ります。自分で美しい色を見つけるのは楽しいのではないのでしょうか。タマネギやシュンギクなどの野菜や、ドングリなどの木の実からも染め液を作ることができるそうです。染め液の作り方が具体的に示され、実用本として使えるでしょう。

『コーヒー豆を追いかけて』。こちらにも環境問題を含んだ本ではないかと思います。現在コーヒーは色々な国で作られていますが、毎日のように飲まれているコーヒーの裏には、様々な問題も隠されていることが、この1冊から分かります。畑を作るために熱帯林が切り開かれることで、森にすむ動物たちが行き場を失って農地を荒らしたり、人間に危害を加えたりすることも少なくありません。また、熱帯林が失われることは、地球温暖化の原因にもなっています。そのほかにも、コーヒー豆の値段はニューヨークにある先物取引所で決められていて、買い取り価格は企業や組合、仲買人が決めているために、農民たちには利益が還元されないといった経済格差の問題など、様々な課題について言及しています。本書ではフェアトレードについて具体的に紹介しています。

『人工知能と友だちになれる?』は「子供の科学★ミライサイエンス」シリーズの1冊です。もはや「AI」や「人工知能」は現代を語る上で外せないキーワードですが、クラスにロボットがいるというマンガで「人工知能ってなんだろう?」「おしゃべりは得意?」「テストは得意?」といった疑問に、分かりやすく答える形で作られています。AIが得意なところ苦手なところなど、子どもたちが興味を持って読める本だと思います。

現在、農業や漁業などの分野でも、様々な最新技術が使われています。『科学がひらくスマート農業・漁業』シリーズから今回紹介するのは、第1巻の『人工衛星とITで米づくり』です。農業でも、米の生長を調べるためにドローンを使ったり、宇宙からの人工衛星から送られてきたデータで収穫する時期を決めたりするなど、色々なことが行われるようになっていくことがわかります。経験が少なくても新技術を生かして安定したコメづくりを保證することで、後継者問題が解決するようになっていくかもしれません。

## ■社会・歴史・政治・伝記・他

最後に「社会・歴史・政治・伝記」等でまとめたテーマから紹介します。歴史からは『おもしろ謎解き「縄文」のヒミツ』。これは「土偶女子」として知られている、こんだあきこさんによる縄文の本です。「分子人類学者」「先史生態学者」「植物考古学者」「考古学者」など異なる分野のプロフェッショナルの方々の話を聞きに行き、縄文時代の秘密を探ります。私たちのDNAを調べると、自身の祖先が縄文人であったかが分かるとか、土偶はなぜ面白い形やポーズをしているのかなど秘められた縄文人の思いも分かったりと楽しく読めます。1万3000年も続いた縄文時代。実はその歴史は、随分長いのですね。

同じく歴史、そして社会という観点から『アイヌ もっと知りたい!くらしや歴史』。アイヌに関する法律が変わるといふ動きがあることもあるためか(2019年4月19日現在、アイヌ民族を「先住民族」と明記したアイヌ新法が成立)、本書を含め、2018年はアイヌの本が大判で2冊出版されました(もう1冊は『アイヌ文化の大研究』(PHP研究所, 2018年12月刊))。アイヌの文化や生活、言葉など、様々なことについて知ることができる本です。アイヌの言葉で、目次が作られているのも特徴的です。北海道の地名がアイヌ語由来であることはよく知られていますが、トナカイ、ラッコなどもアイヌ語というのは初めて知りました。もっと色々な情報を知りたくなってきます。

『モスクへおいでよ』。東京・代々木に「東京ジャーミイ」というイスラーム教の礼拝所(モスク)があります。そこで見学者ガイドをされている、日本人信徒の下山茂さんが、イスラームについて分かりやすく説明してくれます。モスクはどのようなになっているのか、女の人がかぶっているものは何なのかなど数々の素朴な疑問をはじめ、下山さんがどういう経緯でガイドを務めるようになったかなどについても書かれています。すてきなモスクの写真も掲載されていて、ちょっとモスクに行ってみたくなる1冊です。

少し変わった本で、『じゃんけん必勝法』を紹介します。中国から伝わってきた拳遊び・虫拳というのが平安時代の記録にあることなど、じゃんけんの歴史も織り交ぜつつ、昔と今のじゃんけん必勝法について解説しています。今のじゃんけんは江戸時代の日本発祥という説も詳しく、世界大会があるということも紹介しています。じゃんけん覗きや最初はグーのルーツも楽しめます。マスコミ取材がきっかけでできた本だそうです。

オリンピック関連の本もたくさん出版されました。読み物として紹介するのは『これがオリンピックだ』。著者は、日本オリンピック・アカデミー会員（副会長・オリンピック研究委員会委員長）であり、オリンピック研究を専門とされている舛本直文さんです。2000年シドニー大会より現地視察をされていたりと、関係者の方であるだけに説明も非常に詳しいです。この本の目的が「オリンピックの基本となる「オリンピズム」という大切な考え方をみなさんにしっかり理解してもらうこと」とあるように（「はじめに」より）、歴史や文化面からも詳しく説明しています。スポーツの面白さももちろんですが、なぜオリンピックをやるのか、その意味を知るためにも、子どもたちに読んでほしいと思います。

最後に、『天皇制ってなんだろう？』。これはQ&Aで構成されている本で、比較的読みやすく、大人としても少し気になる本です。著者は弁護士の宇都宮健児さんです。彼は「弁護士法」第1章第1条に掲げられている「基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする」（p. 5）という考えに基づいて活動されてきましたが、その中で「法の下での平等、基本的人権ということについて考えを深めていくと、天皇制と矛盾が出てくるのではないか？」と思いはじめた（p. 6）ことから、天皇制について考えるようになったそうです。天皇制についても度々話題になりますので、この辺りについてもこの本を読み、その歴史や国民の制度の使われ方といったことなどについても、注目しながら読んでいただければと思います。

以上、皆さん、どうもありがとうございました。

（於：株式会社図書館流通センター 2019年3月13日・14日）  
※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。